

平成26年度
別海町生き抜く力向上策定プロジェクト報告書

平成27年3月
別海町教育委員会学務課

目 次

はじめに

第1章 本事業について

- 1 趣 旨
- 2 事業内容
- 3 調査対象地域
 - (1) 秋田県横手市
 - (2) 大分県豊後高田市
 - (3) 高知県四万十市
- 4 構成員・3地区
- 5 研修内容
 - (1) 視察前研修及び会議
 - (2) 視察研修
 - (3) 視察研修報告及びブロック会議
 - (4) 教育講演会及び全体報告会

第2章 視察研修報告について

- 1 秋田県横手市の教育行政等に関わる視察研修報告書
- 2 大分県豊後高田市の教育行政等に関わる視察研修報告書
- 3 高知県四万十市の教育行政等に関わる視察研修報告書

第3章 各ブロックでの「別海町型教育」の推進案

- 1 学力の向上（中央地区担当）
- 2 生活力の向上（東地区担当）
- 3 教師力の向上（西地区担当）

おわりに

はじめに

私が2年前に着任した当時の全国学力状況調査結果では、北海道は下位に低迷しており、その北海道内において根室管内はさらに下位の状況でした。ところが、そのような中で、本町は全国・全道平均に迫っていることがわかり、安堵するとともに、その要因は何か、さらなる基礎学力の定着・向上を図るためには、今後何が必要なのかを考えていました。

当時は各学校を頻繁に訪問し、授業を見せてもらいましたが、教職員は、総じて子どもたちとしっかり向き合い、熱心な授業を重ねており、子どもたちも落ち着いていました。また、各学校では自主研修会や公開研究会等積極的に取り組み、教師力の向上に努めている姿がありました。この頑張っている教職員に、さらに研鑽を深めてもらおうと、全国の教育先進地に派遣し、見聞を広めるとともに、自身の目で確かめ、感じたもの・得たものを持ち帰ってもらい、本町の教育に活かしたいと考えました。同時に先駆的に取り組む県教委や市町村教委がどのような構想をもって進めているのか調査する必要もありました。

そして、私の単純な発想に、教委職員が原案を作成し事業予算を確保して始まったのが「生き抜く力（質の高い学力・豊かな心・逞しい生活力）アッププロジェクト事業」です。今回は道外の3地域（学力向上の秋田県横手市、生活力向上の大分県豊後高田市、教師力向上の高知県四万十市）に教職員等を派遣し調査を行いました。派遣した3地域とも大きな収穫を抱えて戻り、プロジェクト会議等の中で報告会開催や、今後の本町において活かせるものは別海型教育ビジョンの構築の参考にしていく作業を進めております。

また、視察先の秋田県横手市伊藤教育長が、視察チームの熱心さに感動し、別海町を訪問してくれました。講演会や学校訪問をしていただき、相互交流を進めていくことが提唱されております。

今後も、このような交流や教職員派遣を継続し、この「生き抜く力向上策定プロジェクト事業」が、別海型教育の礎となることを願っております。

平成27年3月

別海町教育委員会教育長 真 籠 毅

第1章 本事業について

1 趣 旨

本町における子どもたちの学力の現状は、平成25年度の全国学力・学習状況調査によると、全国的には上位地域と差があり、平均を下回っている。教育の機会均等という義務教育の理念を踏まえれば、本来生まれ育ったところで学力に大きな差があることはあってはならないことであり、義務教育で身につける基礎学力は、子どもたちの進学はもとより、就職や社会進出に多大な影響を及ぼすものである。

さらに、本町の教育において、保護者や地域社会からのニーズが多様化してきており、学校は学校内外の環境の変化に対応し、組織機能を持続成長させていくことが求められている。その意味で、「すべては今いる一人一人の子どもたちの為に」と志を持って、教壇に立っている教職員の「教師力向上」と「学校組織の活性化（学校力の向上）」は、教育においては重要な課題である。

このことから、教育に関して全国の先進地の中から、本町の地域性に見合う取組を実践する地域を厳選し、それらの地域を調査研究・分析していくことが、別海型の教師力・学校力向上の施策を展開していくために必要である。

別海型の学校教育を構築することによって、本町の将来を担うであろう子どもたちの基礎学力の向上を実現し、「生き抜く力」の向上を図るため、本事業を実施する。

2 事業内容

全国学力・学習状況調査において、正答率が上位、または、学習に挑む意欲や生活力の進捗が著しい他府県における市町村の取組を調査し、町内の教職員が分析・研究・立案を行い、実践の改革に活かす。

調査対象地域の教育に関する取り組み、体制等を学び、学校と保護者が状況や展望を共有する中で、受身ではなく、自ら取り組む児童・生徒を育むために、「別海」型の「教師力」育成・「学校力」の構築と実現をめざし、組織的・継続的な取り組みを展開する。

そのことにより、結果として、道教委が「オール北海道」で目指す到達目標である基礎学力の保証や、本町のめざす「教育推進目標」の推進に大きく寄与できる事業となる。

教員の指導力向上を図るとともに、本町の地域性、家庭環境、生活習慣にあった別海型の学校・学習指導体制の構築を行うものとする。

3 調査対象地域

(1) 秋田県横手市

<選定理由>

秋田県は平成19年度の全国学力・学習状況調査から6年連続で全国1位である。

また、秋田県の取組は成功事例として注目を浴びており、全国各地からの視察が多い。実際にその取組を導入し、成果を上げている地域もある。

その中でも横手市においては、人口は98,367人（平成22年度国勢調査より）で別海町と比べると約6倍の人口であるが、市町村合併でできた市ということもあり、本町と同規模の町村が存在する。

このことから、秋田県の教育に関する有効的な取組と、本町との共通点を考え、秋田県横手市を調査対象地域とする。

(2) 大分県豊後高田市

<選定理由>

大分県豊後高田市では、「教育のまちづくり」をスローガンに掲げ、「学びの姿」の構築を図るため、学校と家庭、そして地域とが一体となった教育を推進している。その取組は、かなり緻密に、かつ、地域性にあわせて計画されており、さらに、その取組において、学校だけではなく家庭や地域の協力の下で実現されている。学校、家庭、地域の連携や協力体制がうまく取れていると考える。

さらに全国学力・学習状況調査の結果によると、平成24年度、平成25年度ともに全国平均を上回っているため、実績も目に見えている。

学校、家庭、地域における教育の取組内容だけではなく、学校、家庭、地域での協力体制も学べると考え、大分県豊後高田市を調査対象地域とする。

(3) 高知県四万十市

<選定理由>

平成19年度に復活した全国学力テストで、全国平均を下回る結果が続いていたが、秋田式を導入してから、平成25年度の結果は、平成21年度比で、全国平均正答率との差が縮まった。

秋田式を導入していく上で、地域性にあった学習体系を構築したことも学力向上の要因と考えることができる。また、教育委員会を中心とする行政主導の実践例として学ぶべき諸点も多い。

さらに、高知県四万十市は本町と友好都市サミット協議会を提携しており、よりスムーズに、かつ密接に交流できると考える。

このことから、高知県の地域性にあった独自の学習体系を構築するノウハウと、つながりやすさを考え、高知県四万十市を調査対象地域とする。

4 構成員・3地区

別海町生き抜く力向上策定プロジェクト会議設置要領による。※p. 7 参照

町内3地区※（中央、東、西地区）の小・中学校を1ブロックとし、本町の課題である「学力の向上」「生活力の向上」「教師力の向上」を各ブロックで担当し、その課題解決に向けて協議する。

なお、視察地域への派遣者は、各ブロックから2名とする。（校長含む）

※町内3地区について

- ①中央地区（上風連小・中学校、中西別小・中学校、別海中央小・中学校）
テーマ：学力の向上について
- ②東地区（野付小・中学校、別海小・中学校、中春別小・中学校）
テーマ：生活力の向上について
- ③西地区（西春別小・中学校、上西春別小・中学校、上春別小・中学校）
テーマ：教師力の向上について

5 研修内容

（1）視察前研修及び会議

本町の課題確認及び調査対象地域の事前学習を実施。

- ・視察前研修 平成26年6月20日 実施
- ・視察前会議（中央地区） 平成26年7月29日 実施
（東地区） 平成26年7月18日 実施
（西地区） 平成26年7月24日 実施
- ・視察前打合せ（中央地区） 平成26年8月13日 実施

（2）視察研修

調査対象地域（3地域）に視察へ行き、取組内容や地域の状況等を把握する。

平成26年度 視察研修実施状況			
	秋田県横手市	大分県豊後高田市	高知県四万十市
中央地区	2名		
東地区		2名	
西地区			2名
事務局	1名	1名	1名
計	3名	3名	3名
合計	9名		

- ・秋田県横手市 平成26年8月21日～8月23日（3日間）
- ・大分県豊後高田市 平成26年7月29日～8月1日（4日間）
- ・高知県四万十市 平成26年7月27日～7月30日（4日間）

(3) 視察研修報告及びブロック会議

視察研修終了後、派遣職員を含めて視察研修の報告とワークショップを各ブロックで実施。

- ・副座長会議 平成26年 9月18日 実施
- ・視察研修報告 平成26年10月 3日 実施
- ・ブロック会議（中央地区） 平成26年12月 2日 実施
- （東地区） 平成26年12月11日 実施
- （西地区） 平成26年12月 3日 実施

(4) 教育講演会及び全体報告会

教育に関して先進的な地域から、講師を招聘し、町内教職員を対象に教育講演会を実施。

（講師：秋田県横手市教育委員会 教育長 伊藤 孝俊 氏）

ブロック会議で協議した内容の報告会を実施。

- ・教育講演会 平成27年2月4日 実施
- ・全体報告会 平成27年2月4日 実施

別海町生き抜く力向上策定プロジェクト会議設置要領

(平成26年 5月 7日 教育長決定)

(目的)

第1条 「別海町の生き抜く力（質の高い学力・豊かな心・逞しい生活力）の向上に関する取組方針」に基づき、別海町の生き抜く力（質の高い学力・豊かな心・逞しい生活力）の向上に関する取組方針策定プロジェクト会議（以下「プロジェクト会議」という。）を設置するものとする。

(構成)

第2条 プロジェクト会議の構成員は、別海町内小中学校の校長・教職員により構成するものとし、次に掲げる者を別海町教育委員会（以下「教育委員会」という。）が委嘱する。

(1) 別海町小中学校校長会から推薦の校長

(2) 別海町立小中学校校長から推薦の教職員

2 前項に定めるもののほか、オブザーバーとして、別海町立保育所・幼稚園、私立幼稚園、別海高校、根室教育局に対し、必要に応じ参加を呼びかけるものとする。

(委員の任期)

第3条 委員の任期は1年とする。

(座長及び副座長)

第4条 プロジェクト会議に座長を置くものとする。

2 座長は教育長をもって充てるものとする。

(検討・協議項目)

第5条 プロジェクト会議は、第1条の目的を達成するために次の項目について行う。

- 別海町の課題について
- 別海町の生き抜く力の向上に関する取組方針について
- その他の別海町生き抜く力向上に関すること

(会議の進め方)

第6条 プロジェクト会議は、教育長が召集するものとする。

2 プロジェクト会議は、第5条の項目についての検討・協議・策定を行うものとする。

(事務局)

第7条 プロジェクト会議の事務局は学務課学務担当に置く。

2 事務局長は、指導参事をもって充てるものとする。

(その他)

第8条 この要領の定めるもののほか、必要な事項は教育長が定める。

平成26年度 別海町生き抜く力向上策定プロジェクト会議

【構成員】

	学校名・校長会	職 名	氏 名	備 考
1	別海町校長会	校 長	青 坂 信 司	副座長
2	別海町校長会	校 長	飯 田 輝 雄	副座長
3	別海町校長会	校 長	志 道 仁	副座長
4	別海小学校	教 諭	高 橋 佳 伸	
5	野付小学校	教 諭	大 石 智 司	
6	上風連小学校	教 諭	久 門 弘 宜	
7	中西別小学校	教 諭	水 内 健一朗	
8	別海中央小学校	教 諭	山 田 妃呂美	
9	中春別小学校	教 諭	佐 野 達 也	
10	西春別小学校	教 諭	三日市 雅 保	
11	上西春別小学校	教 諭	佐 藤 雅 澄	
12	上春別小学校	教 諭	綾 野 正 巳	
13	別海中学校	教 諭	長 亘	
14	野付中学校	教 諭	三 宮 貴 史	
15	上風連中学校	教 諭	山 中 武 彦	
16	中西別中学校	教 諭	瀧 本 樹 子	
17	別海中央中学校	教 諭	伊 藤 大 輔	
18	中春別中学校	教 諭	川 村 幸 樹	
19	西春別中学校	教 諭	栗 林 俊 一	
20	上西春別中学校	教 諭	西 尾 和 人	
21	上春別中学校	教 諭	吉 川 夏 実	

【事務局】

1	別海町教育委員会	教育長	真 籠 毅	座 長
2	別海町教育委員会	教育部長	中 谷 隆 弘	
3	別海町教育委員会	指導主幹	谷 口 秀 文	
4	別海町教育委員会	指導参事	古 森 康 晴	事務局長
5	別海町教育委員会	学務課長	佐々木 栄 典	
6	別海町教育委員会	学務主幹	松 田 勝 広	
7	別海町教育委員会	学務主幹	福 原 義 人	事務局次長
8	別海町教育委員会	学務主事	白 崎 百 恵	

第2章 視察研修報告について

- 1 秋田県横手市の教育行政等に関わる視察研修報告書・・・・・・・・・・ 1 1

- 2 大分県豊後高田市の教育行政等に関わる視察研修報告書・・・・・・・・・・ 1 7

- 3 高知県四万十市の教育行政等に関わる視察研修報告書・・・・・・・・・・ 2 3

1 秋田県横手市の教育行政等に関わる 視察研修報告書

視察期間： 平成26年8月21日（木）～8月23日（土）

別海町生き抜く力向上策定プロジェクト視察地派遣事業

秋田県横手市の教育行政等に関わる視察研修報告書

- 1 視察目的 町内の教職員が全国学力・学習状況調査において正答率が上位、または、学習に挑む意欲や生活力の進捗が著しい秋田県における横手市の取組を調査し、分析・研究・報告を行い、実践の改革に活かし、「別海」型の学力向上の推進・子どもの家庭学習の改善を目指し、組織的・継続的な取組を展開する。
- 2 視察期間 平成26年8月21日（木）～8月23日（土）3日間
- 3 視察者 別海町中央地区代表
別海町立上風連中学校 校長 志道 仁
別海町立別海中央小学校 教諭 山田 妃呂美
別海町教育委員会 指導参事 古森 康晴

4 視察地情報（平成26年6月現在）

人口	約96,470人	学校数	私立幼稚園4（公立なし） 小学校22
面積	約693平方キロ		中学校7 県立中学校1 特別支援学校1
人口密度	約139人	児童数	4,318名
基幹産業	農業、漁業、酪農業、商業	生徒数	2,286名

5 視察内容

(1) 教育委員会の取組

ア 指導主事訪問の実際

- (ア) 事務所と市の指導主事の役割を明確にしている。（教科や目的に応じて分ける）
- (イ) 設置者の指導主事は、要請なし訪問によるスピード感ある対応ができる。

イ 「言語活動の充実」に係る研究指定事業

- (ア) 言語活動の充実による確かな学力の育成
- (イ) 研究指定区の小中学校による公開研究会の実施（休業日として全教員参加）
- (ウ) 言語活動の充実による授業改善と学習評価の工夫改善

ウ 学校図書館経営の充実

- (ア) 学校司書補助員の配置による学校図書館の改善を図る。
- (イ) 教育長訪問の際、学校図書館の課題について協議する。

エ 県学習状況調査の活用

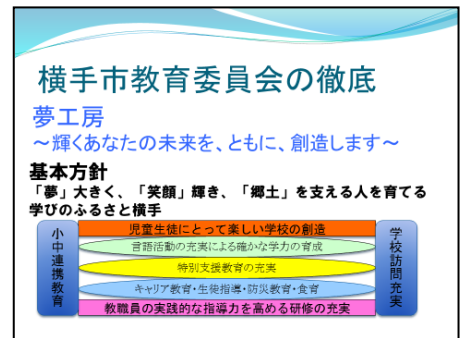
- (ア) きめ細かな分析と的確な指導助言に活用している。
- (イ) 授業改善の資料に活用している。

オ 学校生活サポート事業の活用

- (ア) 在籍を問わず、困り感のある学級で活用する。
- (イ) 雇用条件は時給1,050円で6時間勤務となっている。
- (ウ) 市の予算は、40名で5,000万円となっている。

カ 小・中連携教育及びキャリア教育の推進

- (ア) 各中学校区における小・中連携カリキュラム、小中合同研修会の推進
- (イ) 小学校段階からの一貫性のあるキャリア教育の展開
- (ウ) 次世代ものづくり人材育成事業の推進（科学お楽しみ広場の実施など）
- (エ) キャリア教育研修会の実施



- キ 指導方法の工夫改善及び少人数学習推進事業に係る加配の活用
 - ・確かな学力の向上を目指し、少人数指導やIT等多様な指導方法を工夫し、少人数集団による習熟度別学習・課題選択学習等での個に応じたきめ細かな指導を展開する。
 - ・少人数学習推進事業の加配校は小学校で4校、中学校で16校設置している。
 - ・指導方法の工夫改善に係る加配校は小学校8校（20名）、中学校6校（32名）で配置している。
- ク 県学習状況調査の活用（H14から実施）
 - ・本調査の活用により学習指導要領の内容の定着度を把握し、各小・中学校において自校の実態や課題をよりの確にとらえ、学習指導の工夫改善を図る。
 - ・学校ごとの通過率や設問の分析、学校間の情報交換を重点的に行っている。
- ケ 単元評価問題等の活用
 - ・「秋田県学力向上支援 Web」で配信されている単元評価問題を活用し、授業改善を推進し、児童生徒の基礎学力の向上に資する。
- コ 教育専門監の活用
 - ・市内3名の専門監加配を活用した授業等の質的向上（兼務校でのIT）
 - ・専門監の各種研究会、研修等での活用（アドバイザー、授業協力者等）
- サ 秋田大学の横手分校・附属教育実践支援センターとの連携及び事業の活用
 - ・市の研究指定事業の全体指導者、学校の要請に応じた研究会等の指導・講話など大学の教員に対する指導者を要請する。
 - ・附属教育実践支援センター「学びの総合エリア」事業の活用
- シ 小学校外国語活動の充実
 - ・8人のALTを雇用し、市内22校の小学校すべてに35時間派遣可能な体制を整えている。
- ス 特別支援教育の充実
 - ・特別支援教育専任指導主事を配置し、各小中学校からの「気になる子」の状況確認、知能検査の実施等、特別支援教育に係る様々な要請等に対応する。
 - ・就学前言語障害児指導事業において言葉やコミュニケーションなどの支援が必要な就学前の幼児に対し、相談や指導を行うために「幼児ことばの教室」を設置する。

(2) 市立金沢小学校の取組

ア 金沢小学校の取組

(7) 言語活動の充実による学力向上推進事業

- a 思考力・判断力・表現力を高める学び合いを工夫するために考えをもつ時間を保障し、ペアや小集団での思考の場や伝え合う場、自分の言葉で説明する場を設定している。
- b 思考の深まりがわかるノート指導では、根拠や発展を含んだ言葉を使って授業の振り返りを行う。また、メタ認知を通して学びを確かなもの、自分のものにしていく。
- c 「学び」のためのま・NAVIを活用した学習規律の徹底を通して、学び方や学ぶ姿勢を身に付けている。
- d 小中連携「学び合いの姿」系統表を使って、聞く・話す・話し合う活動の目安を明確にすることで、子どもに明確な目標をもたせている。
- e 『「聴いて考えてつなげる」学習を意識した授業改善をめざして』では、教師の立ち位置だけでなく、声掛けの意味や目的を明確にした上で、教師がかかわることの大切さを全教師で共通認識をもっている。



育てたい力の明確化と提示の様子

f 研究に関する指導助言をいただいている横浜国立大学の高木教授には、児童の話し合いが一方通行になっていてつながっていない、発信しているだけであると指摘を受け、授業の中でストップモーションを繰り返し、指導した結果、児童の意識が変わり、考えをつなぐことの楽しさや自分の発言が役に立っていることを実感し、友達にも気付かされた。

g 言語活動の充実に取り組んできた結果、児童の学校生活が豊かになった。今までの集会活動「ひびきの集い」では音読発表会後の感想交流で指名されなければ発言しなかった児童が、自主的に感想を言うようになった。



「話す・聞く」に関する指導事項の机上掲示

(4) 学校教育の活性化に向けて

- a 学校農園を活用して横手やきそばの具材であるキャベツを栽培している。
- b 小中学校の円滑な接続をめざした中学校区における研修会を充実させている。
- c 平成28年度の統合に向けて学校間連携を具体的に進めていくため、学習規律や研修のスタイルを北中学校区で統一して取り組んでいる。

(3) 市立横手北中学校区の全体研修会

ア 市立横手北中学校区全体研修会における各種部会の様子

＜国語＞解釈だけで終わってしまう

- ・自分の考えをもたせるには解釈ではなく、松尾芭蕉の読みに対して自分の感じ方話すことが大切である。主体が芭蕉になっては解釈になり、自分であれば考えになる。
- ・自分の考えを深め合う授業とは、感じ方を交流する授業である。

＜社会＞経済概念と社会科の関連

- ・小学校第5学年で学習した生産量と消費量の関係を中学校の経済の学習にも活用する。
- ・わかったことと、これからのことをつないで考える。
- ・経済学の根幹の学習が小学校第3学年の社会科にあるのではないか。学びの蓄積を大切にしたい。

＜数学＞学力向上と授業改善

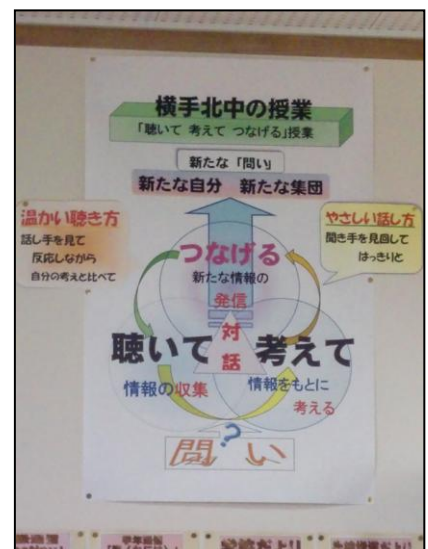
- ・学力の向上には、学習規律のバランスが大切である。
- ・説明するには根拠を明らかにする必要がある。その上で話し合い活動がある。
- ・学習規律の定着において小6と中1を同じカテゴリーに入れることでギャップが埋まり、小6のフォローを中1で行う。

＜理科＞考えが引っ張られてしまう展開

- ・ペアや小集団で話し合うと、発言が偏ったり、一方に引っ張られてしまったりする傾向にある。
- ・気にしていることをしっかり確かめてから本時の問いに入る。実験準備を先行させるのではなく、実験や観察の予想を立ててから準備を行う。

＜英語＞目的のある学習活動になっているか。

- ・「〇〇をつくる」など、活動を達成するために英語を使う。
- ・国語科の授業展開と似ていて生徒の作品にアドバイスをする場面がある。



横手北中学校の授業モデル

＜体育＞プレーを生徒に見せる工夫

- ・評価する観点は、技術であって思考ではないことから、作戦を考えさせることに終始してはいけない。
- ・映像で自分のプレーを見直せるように、自分の姿容を捉えられるような工夫が大切である。
- ・評価規準について協議で話題になるなど、目標に準拠した指導がなされている。

＜道徳＞資料との対話・自己との対話

- ・国語ではないので、読解に終始しない。
- ・発問で「私は何をみつけたのでしょうか。」とした方が、「見つけたものは何ですか」より考えが深まる。
- ・生徒同士が立って交流する場面を位置付けたが、考えを深める手立てにならない、ただのノートの写し合いになってしまうのではないか。
- ・ステップシートにある「自分の出番」（タケノコ発表）を中学校でも取り組んでみる。



夏季休業中の研修会の様子

＜特別活動＞学級づくりの見直し

- ・アンケートの結果をきっかけに生徒自身が自分の学級を見直し、学級の取組を考えていく。
- ・成果を話題にして自分たちの取組を評価させることで、生徒自身に指導と評価の一体化が図られる。

6 成果と課題

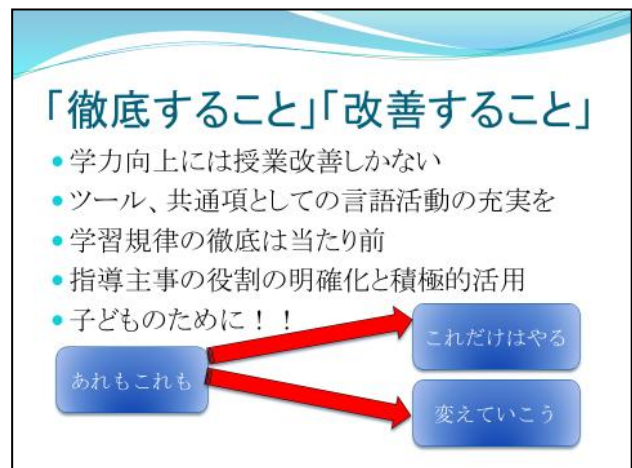
(1) 成果

ア 指定校型研究会の開催については、横手市の取組を参考に現在、別海町教育研究会の研修日として年間3日確保している時間を「生き抜く力アッププロジェクト指定校」の公開研究会として授業実践もしくは研究発表を行い、全町の小中学校を休校にして全教師が参加するスタイルに変換していく方向性が固まった。

なお、別海町教育研究会は任意団体なので長期休業中、もしくは部会ごとに研修の機会は保証する。

イ 町独自の研究テーマの設定については、「たくましい子どもの育成を目指し、生き抜く力の向上を図る。」を町としての研究テーマとし、取組については項目ごとに学校に任せ、特色のある教育活動を展開させる方向性が固まった。研究テーマを揃えることで、成果と課題を比較でき、町としての方向性を明示できる。

ウ 国や県の指定事業について、小中学校のどちらかだけでなく、補助を市で予算付けて中学校区で研究できるように工夫していることから、中学校区の教育推進の方向性を生み出す手立てとなっていた。



(2) 課題

ア 教育行政執行方針と学校改善プランの関連については、毎年2月頃、各中学校区で行われる学校関係者評価委員会の中で「15歳の育ち」を分析し、検証する。各中学校区では、その育ちを目指すために保幼小中でどんなことに取り組むか協議し、各学校等の改善プランを作成する必要がある。

イ 町の特色を生かした校内システムの構築については、本町は保幼小中高のつながりが明確であることからそのメリットを生かして、同一集団によるシステムの構築を検討したい。

学年や担任が変わる度に学校生活におけるシステムが変わっては子どもが混乱し、安定した生活リズムを確保するまで時間がかかり、授業に集中できなくなる。

そこで、小中学校9年間でそろえたいものと、そろえてはいけないものを洗い出し、中学校区で統一したい。地区ごとの同一集団をどのように育てるか、自治体が責任をもって子育てのビジョンを打ち出し、学校は教育活動を通して具現化する。そのためには、私立幼稚園の理解が必要であることから別海町幼児教育研究会の協力を得て、保幼・小の連携を図っていく必要がある。(入学説明会の弾力化・幼児観察の充実・アプローチスタートカリキュラムの構築)

ウ 学校の業務の軽減については、現在の特別支援教育支援員を通常の学級でも配置できるようにし、通常の学級に在籍している発達障害のある児童生徒の支援の充実を図る必要がある。また、スクリーニング検査の案内や吟味検査など、就学に関する事務手続きを支援教育委員会事務局で行う。

エ 定例教頭会議については、管理職の指導力が問われることから指示伝達事項に加えて、研修の充実を図る必要があることから、次のような事例研修を行う。

○ 指導案の助言

・サンプルを出して、目標と活動と評価の整合性を指導する。

○ 問題行動のアドバイス

・相談に来た先生の情報と合わせて事例を提示する。

○ 保護者の対応

・内容と保護者の情報を提示して対応策を考える。

※学校運営の活性化を図るため、内容の指導だけでなく、相手意識のある声掛けが出来るようにする

2 大分県豊後高田市の教育行政等に関わる 視察研修報告書

視察期間：平成26年7月29日（火）～8月1日（金）

大分県豊後高田市の教育行政等に関する視察研修報告書

1 視察目的 町内の教職員が全国学力・学習状況調査において正答率が上位、または、学習に挑む意欲や生活力の進捗が著しい大分県における豊後高田市の取組を調査し、分析・研究・報告を行い、実践の改革に活かし、「別海」型の体力向上の推進・子どもの生活改善を目指し、組織的・継続的な取組を展開する。

2 視察期間 平成26年7月29日（火）～8月1日（金）4日間

3 視察者 別海町東部地区代表
 別海町立中春別小学校 校長 飯田 輝雄
 別海町立別海中学校 教諭 長 亘
 別海町教育委員会 主事 白崎 百恵

4 視察地情報（平成26年6月現在）

人口	約23,500人	学校数	公立幼稚園2（私立なし） 小学校10
面積	約206平方キロ		小中一貫校1 中学校5 高等学校1
人口密度	約111人	児童数	1,051名
基幹産業	農業、漁業、酪農業、商業	生徒数	574名

5 視察内容

(1) 教育委員会の取組

ア「昭和の町は教育のまちです」事業

(ア) 市教育委員会は、市の基本方針である「夢をかたちに、未来に光り続けるまち豊後高田」の実現を目指し、ヒト・モノ・コトを通して教育行政を推進している。

(イ) 昭和30年代の活気と隣近所や地域の人々とのふれあいにあふれた、その時代の良さを生かそうという取組を大切にしている。

(ウ) 学校と家庭、地域が一体となった「教育のまちづくり」を推進している。

(エ) 地域の教育力やかかわり合いに支えられた学校づくりのもと、子どもたちを育むことをめざしている。

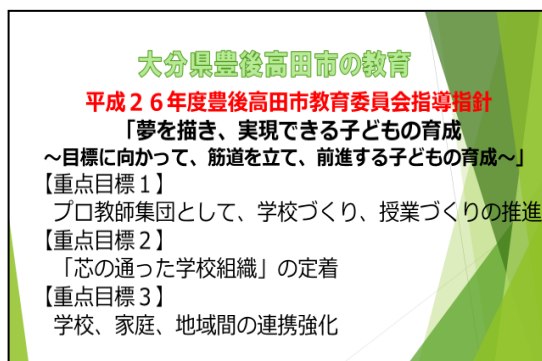
(オ) 「学びの21世紀塾」を軸に展開している。

a 「学びの21世紀塾」等の事業を通して得られた学力向上施策の成果や課題をもとに各種委員会や会議等で審議し、推進計画を実施する。

b 学ぶ喜びや伸びる実感もてる授業づくりや学びを支える環境づくり、家庭や地域、幼・保・小・中・高との連携と交流を図る。

c 「昭和の町は教育のまちです事業」における基礎・基本の定着実行委員会の重要課題である「授業力向上」の取組について、指導教諭、学力向上支援教員による積極的な授業公開と日常的な校長の授業観察による指導及び互見授業の実施を行う。

d 習熟度に応じた個別指導を行い、一人一人のつまづき解消の取組を行うとともに、日常的に家庭と連携し家庭学習の定着・充実に向けた取組を行う。習熟度別少人数指導教員を2校



に配置し、配置校を核として、一人一人の児童生徒へのきめ細やかな指導方法の在り方を検討する。

- e 生きる力を育むための思考力・判断力・表現力の向上の取組を行う。総合的な学習の時間や学校図書館を活用した探求的な授業を推進するとともに、協調学習など学びあう授業を行う。
- f 学力の向上を図るために、校内研修（研究）の見直しを行う。マネジメントサイクルを生かした校内研修（年間2回以上の校内研究会の実施）を実施する。研究の推進については教務主任が行い、見通しを持ち、協働の取組みになるようにする。研究主任会を開催し、目的意識や必要感、課題の共有化を図れるように研究主任の力量を高める。
- g 学力の定着をめざした取組みを学校単独の取組みとせず、地域の課題として捉え、共に解決を図れるよう、地域に教育活動（行事や授業）を公開し、情報を発信しながら、評価に必要な資料を公開することで開かれた教育をめざす。
- h 学力向上支援教員を11校に配置し、配置校を核として6ブロック（A・B・C・D・E・F）における教員の授業力向上及び児童生徒の学力向上に向けた取組を推進する。
- i 主幹教諭の配置により、学校運営を活性化や組織の協働性を高めていくとともに、指導教諭の配置により、高い専門性に裏付けられた実践的指導力に基づき、教育指導に関して、教職員に指導助言を適切に行い、学力向上の取組を強化する。
- k 学力向上支援システム（全国学力・学習状況調査のB問題）や学力・体力の種等を授業で活用し、授業改善に役立て、活用力や問題解決の向上を図る。
- l 「授業力」を向上させるために、教育課程研究協議会（全体会）を年3回開催し、加えて、教科部会では、年6回部会を開催し、全学校で教科における課題解決の取組みが共有できるようにするとともに、提案授業を行い、教員の授業力の向上につなげる。

イ 「学びの姿」の構築を図る「学びの21世紀塾」（塾長：市長・副塾長：教育長）

(ア) 学校五日制が始まった平成14年度に開始。主に土曜日午前を活用した学びや体験教育の場。

(イ) 指導者 157名（市民75 教員等82） ボランティア230名

(ウ) 塾経営者、教員免許所有者、退職教員、堪能な市民などが講師になる。

(エ) 現職教員もボランティアとして参加している。勤務扱いにはならない。

(オ) 市民講座や高校生向けの講座も実施している。

(カ) 教材は業者のものを使用することが多い。講師謝礼は交通費程度。

(キ) 教育課程に位置付いていない内容なので復習が多い。当然授業時数に含まない。

(ク) 学校教育係（義務教育）と社会教育係（生涯学習）が綿密に連携している。

大分県豊後高田市の教育
「学びの21世紀塾」
塾長は市長 副塾長は教育長

- 1 学校五日制が始まった平成14年度に開始。
- 2 主に土曜日午前を活用した学びや体験教育の場。
- 3 指導者 157名（市民75 教員等82） ボランティア230名
- 4 塾経営者、教員免許所有者、退職教員、堪能な市民などが講師になる。
- 5 現職教員もボランティアとして参加している。勤務扱いにはならない。
- 6 市民講座や高校生向けの講座、特別支援児童の体験学習も実施している。
- 7 市で予算化。年1,600万円。
- 8 教育課程に位置付いていない内容なので復習が多い。当然授業時数に含まない。
- 9 学校教育係（義務教育）と社会教育係（生涯学習）が綿密に連携している。

ウ 平成26年度豊後高田市学力向上戦略支援事業

学力向上支援教員を11校に配置し、配置校を核として6ブロック（A・B・C・D・E・F）における教員の授業力向上及び児童生徒の学力向上に向けた取組を推進している。

(ア) 各ブロックの内容

- ・ Aブロック：算数・数学（小・小連携、小・中連携）、協調学習研究、中学理科
- ・ Bブロック：中学校数学（小・中連携、NIE教育）、総合的な学習の時間
- ・ Cブロック：小学校国語（学校図書館活用教育、NIE教育）
- ・ Dブロック：小中一貫教育（英語）、小・中連携

- ・ Eブロック：中学国語、総合的な学習の時間（幼保小中連携）、問題データベース研究
- ・ Fブロック：小学校理科（問題解決学習、実験観察の授業も出る、ICT研究）

(4) 効果測定計画

- ・ 各担当ブロック校における各種学力テストの結果から評価
- ・ 担当する学校の学力向上会議・校内研究会等への参加状況から評価
- ・ 毎月1回開催予定の市学力向上戦略会議への参加状況から評価
- ・ 配置校における指導法の工夫・改善の効果について、授業観察から評価

(5) 公表及び報告

- ・ 教育委員会から学力向上推進計画を地域へ公表
- ・ 全国学力・学習状況調査及び大分県基礎基本状況調査結果を速報で公表

エ 「キラリと光るまち」の場づくり

- (7) 地域に学びの場と人と機会を数多く設け、地域を大切にする子、地域に感謝する子を育てる。
- (4) 学校支援地域本部事業を立ち上げ、地域人材斡旋や人材データバンクを作成し、6地区で結成した。
- (4) 地域人材活用事業を立ち上げ、保護者や地域の人々が授業サポーターとして活躍する制度を整備した。
- (E) コミュニティスクール事業を立ち上げ、学校や地域、保護者の連携を強化するために全学校で組織し、毎月会議を実施している。会議では学校のことを考えた意見が多く協力的である。

(2) 市立真玉小学校の取組

ア 学力向上ステップアップ事業

- (7) 国語科や算数科の躓きやすい学習内容について確実な基礎・基本の習得を図るため繰り返し学習を行い、学力を付けている。
- (4) 複数の指導者を配置し個別指導を行うことにより、児童一人一人の学力アップを目指している。
- (4) 対象学年は全学年で、実施時間は8時30分から10時30分の45分2コマで、実施期間は夏休み中の5日間を設定している。
- (E) 1クラス15名前後の児童に対し、指導者が2～3名配置されている。学習内容については学習プリントに取り組む自学形式で、適宜個別指導を行っている。取り組んだプリントについてはその場で指導者が採点し児童に返却する。
- (4) 指導者については、教員だけでなく、退職校長や地域住民など地域のボランティアが中心となっている。参加したボランティアは日誌をつけ、日々の児童の取組を観察し、校長に報告している。
- (4) 学力向上事業を行った後、2コマ90分を使って水泳学習も行い、学習だけでなく、体力向上の取組にも活用している。
- (4) 参加児童の対応については、スクールバスを動かし対応している。居住地による格差が発生しないように学習機会の均等化に努めている。



学力向上ステップアップ事業の様子

(3) 市立高田小学校の取組

ア 学力向上に関する授業改善

(7) 課題とまとめの一体化を図った1時間完結型授業に学び合いの協調学習を取り入れた授業づくりを目指している。

(1) 1時間完結型授業については、過程ごとに教師の動き、留意点等を掲載した資料を教員に配布し、研修を重ねている。

(2) 協調学習ではジグソー法を取り入れ、課題に対して児童生徒一人一人の捉え方の違いを明確にし、交流することによって学びの理解を深めている。

イ 児童生徒の自律に関する取組としては、「学習・生活スタンダード」を位置付け、学習と生活に関する基準を定め、指導を進めている。

ウ 体力向上に関する取組

(7) 児童の休み時間について、基本的には外遊びを中心に様々な取組を行っている。

(1) 「体力チャレンジタイム」では、始業前の15分につながる運動を行い、月ごとに内容を変えている。この取組によって体力向上だけでなく、落ち着いて1時間目に取り組める児童が増えてきている。

エ 体育科の授業の充実

(7) 体育専科教員を配置し、複数体制で体育の授業を行っている。体育専科教員は近隣の中学校配属教員で、週2～3回程度、小学生を対象に授業している。専科教員が授業を行うことで、「体操や予備運動のパターン化」「少人数によるグループ構成」を行うことにより、授業内での運動量を十分に確保することが可能となった。

(1) 体育専科教員の専門性を生かした授業内容を工夫することにより、児童に体を動かすことの楽しさが伝わり、自主的に運動に取り組む児童の育成につながっている。

オ 遊び場の環境整備

(7) 多様な遊びができるように校舎内外のスペースを利用して遊び場を設定している。この遊び場は体育専科教員によるもので、グラウンドに設置した遊び場には安全性を確保するために芝を張っている。

カ 児童会活動との連携

(7) 外遊びを奨励するために集会活動で児童会が全校児童に働きかけ、児童会主催の体育集会を活用して運動に取り組めるようにしている。

キ 保護者との連携

(7) 児童の体力向上の一層の充実を図るため、徒歩通学を奨励している。

(4) 市立高田中学校の取組

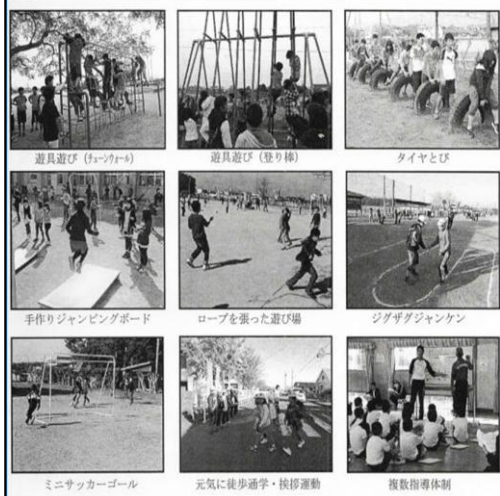
ア 「学力アップコーナー」を活用した主体的学習者の育成

(7) 「学力アップコーナー」とは基礎・基本の定着を目的として設置した自学を行う場である。

(1) 設置場所が職員室前なので生徒が質問したり、教師が指導に訪れたりするなど、自然発生的にかかわりが生まれる。



高田小学校の視察の様子



体力チャレンジタイムの様子

- (ウ) 基本的にはプリントによる自学が中心で、生徒が取り組んだプリントは採点ボックスに入れ、教師が採点して返却する。間違えた問題はやり直して再提出する。
- (エ) 希望者による参加が基本であるが、全校生徒が取り組めるよう各クラス5名ずつローテーションを組んでいる。また、部活動に参加する生徒は、活動が始まる前にプリントに取り組むよう指導している。
- (オ) コーナーが利用できる時間帯は、夏期が19時、冬期が18時までとなっていて、担当教員を中心に個別指導をしている。



学力アップコーナーの様子

イ 図書館を利活用した読書教育の充実

- (7) 日常的に図書室を学びの場とし、授業で積極的に活用する取組を行っている。本棚を2分割することにより、図書室全体が明るくなり、書籍を整理して学習スペースを確保した。
- (1) 各教科で問題解決的な学習を構築し、調べ学習など図書室で行うことを計画している。そのために、各教科担任は資料となる本のリストを作成して授業を行っている。



効果的な図書室の活用方法

4 成果と課題

(1) 成果

- ア 各学校の取組みはもちろんのこと、行政も共に子どもと向き合って教育に熱心であることが、地域の教育力の向上につながっていると感じた。
- イ 「学びの21世紀塾」での取組みを学び、子どもたちに学習する習慣を身につける場を設けることの大切さを学んだ。

(2) 課題

- ア 「学びの21世紀塾」は子どもの学力の定着、体力向上を図ることができ、別海町としても見習うべき点が多くあるが、実際にボランティアをしてくれる地域住民がどれだけいるのか、また、休日の登下校手段（特に遠方から通学している子ども）はどのように対応するのか考える必要がある。
- イ 豊後高田市で実施している内容は、別海町で各学校が実施している取組みと差はほとんどない。違いは、取り組み内容及び成果が目に見えるかどうかである。現在学校において実施している取組みを見える化し、成果と課題を洗い出す必要があると感じた。
- ウ 豊後高田市の「学びの21世紀塾」を別海町ですべて実施することは難しい。
また、すでに放課後や長期休業を活用して補習をしている学校も多くある。別海町においてもできそうな取組や、すでに学校で実施している取組を明確化し、計画的に実施していくことが、より良い効果が得られると考える。
- エ 実際にボランティアをしている地域住民に対して、メリット・デメリット、もっとこうしたら良い、こうして欲しい、などの意見を聞いたかった。

3 高知県四万十市の教育行政等に関わる 視察研修報告書

視察期間： 平成26年7月27日（日）～7月30日（水）

高知県四万十市の教育行政等に関わる視察研修報告書

1 視察目的 町内の教職員が全国学力・学習状況調査において正答率が上位、または、学習に挑む意欲や生活力の進捗が著しい高知県における四万十市の取組を調査し、分析・研究・報告を行い、実践の改革に活かし、「別海」型の教師力向上の構築と実現・日常の授業改善を目指し、組織的・継続的な取組を展開する。

2 視察期間 平成26年7月27日（日）～7月30日（水）4日間

3 視察者 別海町西部地区代表
 別海町立上西春別中学校 校長 青坂 信司
 別海町立上春別小学校 教諭 綾野 正巳
 別海町教育委員会 主幹 松田 勝広

4 視察地情報（平成26年6月現在）

人口	約35,500人	学校数	私立幼稚園1	小学校14
面積	約632平方キロ		中学校11	県立中学校1
人口密度	約57人	児童数	1,721名	
基幹産業	農業、漁業、商業	生徒数	829名	

5 視察内容

(1) 教育委員会の取組

ア 市の教育課題

(7) 小学校は全国学力学習状況調査の結果と同等か上回る状況にあるが、学年が進むにつれて学習評価が1の児童の割合が高くなる。

(イ) 中学校は学力の二極化が顕著である。第1学年の学習内容の定着に大きな課題を抱えている。また、全国学力学習状況調査の結果においては思考力・判断力・表現力等が求められるB問題に課題が見られる。関心・意欲・態度など情意面も全般的に低い傾向にある。

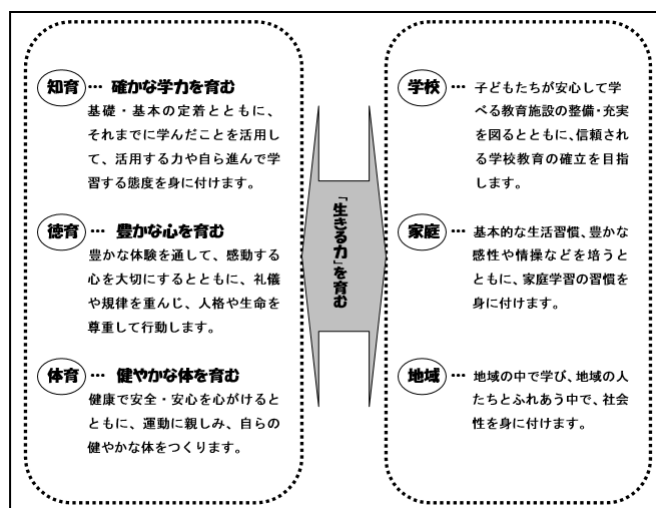
(ウ) 基本的な生活習慣については、小中学校ともに望ましい傾向にある。

(エ) 中学校の暴力行為は改善傾向にあるが、発生率では全国平均を上回る状況にあることから、生徒指導上の課題が急務である。

(オ) 不登校については中学校では改善傾向にあるが、小学校では発生率が高くなってきている。

イ アクションプランの活用

(7) 各学校の課題があるので、1校1役指定研究を立ち



教師力の向上を図るサークル研修

上げ、各学校にミッションを与えている。

- (イ) 学力向上研究会事業
- (ロ) 小学校外国語活動サポーター配置事業
- (ハ) 「心の教育」推進事業
- (ニ) 学校支援員の配置

ウ 朝読書の実施

- (ア) 児童生徒が朝の時間に本を読み、穏やかな一日の始まりを支援する取組となっている。

エ 新聞の購読・活用

- (イ) 新聞を学校生活の中で活用し、コラムをまとめる学習を推奨している。

オ 辞書の配布

- (イ) 小学校3年生に国語辞典、中学校1年生に英和・和英辞典を配付し、常に机の上に辞書を置き、わからない時はすぐ引ける教育環境の整備に努めている。

カ ALTの増員

- (イ) 中村地区に2人、西土佐地区に1人配置しているが、8月より中村地区は2人増とし、合計5人体制で外国語活動・英語教育の充実に努めている。

キ 校長会との連携

- (イ) 校長会を毎月開いて、四万十市の教育の状況について共通理解を図り、『オール四万十』で課題に取り組んでいる。

ク 情報発信から始める教育風土づくり

- (イ) 学校や学校教育課の取組を広報やホームページ等で発信している。



新聞を活用した授業の様子

資料：新聞活用の目的

学校における新聞の活用

→ 学習目標の達成を手助けする
道具・手段

- 子どもたちの論理的思考力、判断力、表現力を育てるツール。(新聞活用や新聞を作ることが目的ではありません)
- 活用の類型
 - (1) メディア・情報媒体としての活用
 - (2) 書く力・伝える力を育む活用

5/13 県学校図書館協議会 権守支部研修会
高知新聞社NIE推進室 高本 浩史さんの講話より

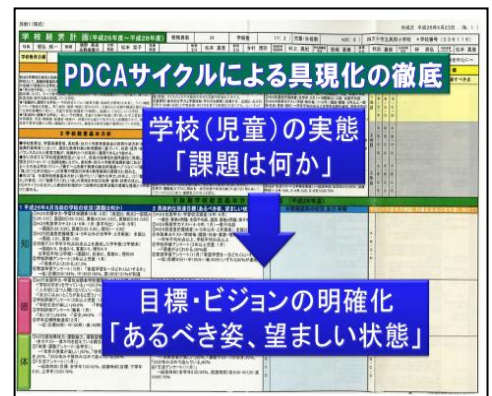
(2) 市立具同小学校の取組

ア 校長のリーダーシップによる職員のベクトルの方向付け

- (イ) 教育課程、教育計画の充実に目指し、知育と徳育と体育のバランスのとれた適切な計画を立案している。
- (ロ) 教育は意図的計画的な一時間一時間の授業と教育活動の地道な積み重ねの上に成り立っていることを理解し、実践している。
- (ハ) 一時間一時間の授業の充実が子どもを変える最良で、最も重要な取組であることを意識する。
- (ニ) 常に「子どもにとってどうなのか？」を判断基準にしながら教育活動を推進している。
- (ホ) 「学校は組織体であること」を意識して、進んで校務分掌に責任をもち、相互理解を図りながら取り組んでいる。
- (ヘ) 教育の結果を常に把握、検証、公表し、結果に責任がもてる教育実践に努めている。

イ 学校ぐるみの具体策の構築と PDCA サイクルによる具現化の徹底

- (イ) 児童の事態を学校の教育課題として捉え、それぞれの教育活動は何のために行うか、目的意識を明確にした取組を展開している。
- (ロ) 全ての教育活動に評価指標を設け、月別展開図において「いつ、だれが、どのように実行するか」について明記し、到達状況を検証しながら次年度の目標を設定する。



ウ 「凡事徹底」「凡事一流」「継続は力」など当たり前のことの継続・徹底

(7) 「5あ」の取組としてあいさつ・あんぜん・あとしまつ・あつまり・あそびに重点を置き、日常的な教育活動の中で繰り返し実践していく。

エ 問題解決型の授業を目指しながら基礎・基本を大切にする取組への移行

(7) 国語の授業は「読み」（音読、朗読、範読、読書）に始まり、「読み」に終わること。

(イ) 教科書教材を大切にした指導を丁寧に行うこと。

(ロ) 子どもが教材の文や言葉、論理展開に目を向ける研ぎ澄まされた発問を考えること。

(ハ) コミュニケーション能力の育成の前提には、「書くこと」を大事にする教育があること。

(ニ) 「読書＝読む活動」「表現＝書く活動⇒話す活動」に習得→活用→発展の最終指導目標があることを肝に銘じて国語科の教科経営を進めること。

(ホ) 算数の習得する学力（知識・理解・技能）については、指導時数の確保、問題解決学習を中心とする確かな指導過程、指導と評価の一体化、家庭学習の充実等により確実に定着させること。

(ヘ) 習得した学力を基盤に、授業を核に、意図的計画的に活用学力を育てること。

(ト) 「どんな力をつけるか＝目標、何を指導するか＝内容」を、系統性に配慮しながらしっかり研究し、教員同士で高め合いながら授業の改善を図っていくこと。

オ 「算数部会」「国語部会」「心の部会」「体の部会」の設置と校内研修の見直し

(7) 「生きる力の育成」に向け、四部会の役割を明確にし、具体的な取組や実践を組織的・計画的に推進している。

(イ) 取組内容については、一人一役として責任をもって確実に実践できるようにする。

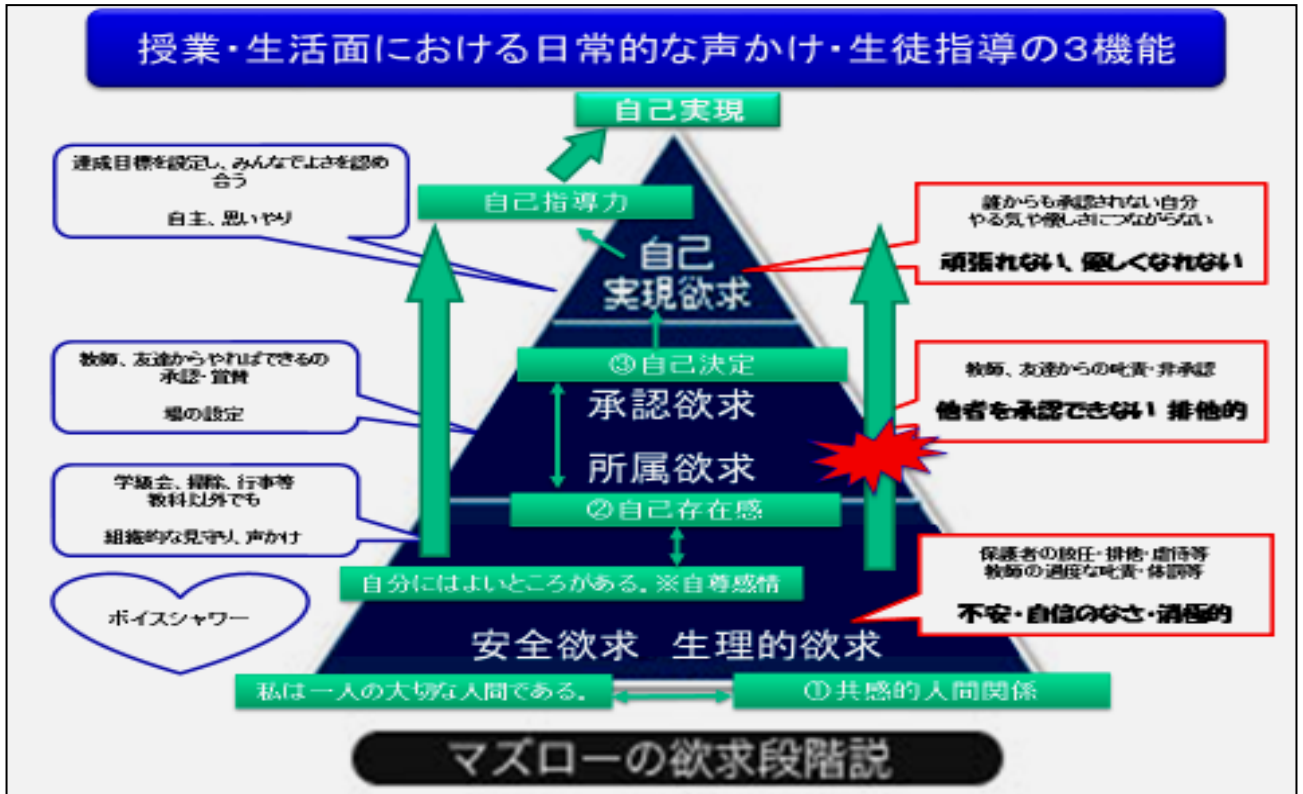
平成26年度四万十市立具同小学校校内研究【四部会 研究内容】
「生きる力の育成」に向け、四部会の役割を明確にし、具体的な取組や実践を組織的、計画的に推進する。

ねらい	活動の内容		
	児童の実態	育てたい力	取り組みの内容【担当】
算数部会 「確かな学力」の向上 ・「学び」が楽しめる授業づくり ・基礎基本の徹底 ・学習規律の徹底と意欲的な態度の育成 ・思考力、表現力の育成	算数 ・学習規律や、みんなで学ぼうとする意欲や態度に課題がある。 ・自分の考えをノートに書くことができるが、自分の言葉で伝える力は弱い。 ・繰り返し（関わり）の活動が弱い。	「課題を解決できる力」の育成 ・学習規律（学習の準備、聞く・話す・読む・書く）の徹底 ・基礎・基本（知識・理解・技能）の定着 ・思考力、表現（書く・話す）力の育成 ・意欲的な学び方（関わる力） ・学習の継続・発展（家庭学習）	① 問題解決型の授業実践の推進【今村・吉岡】 ② 単元テスト【今村・吉岡】 ③ 各学年の指導のポイント見直し【今村・吉岡】 ④ 児童の実態把握【佐田・弘田・吉本】 ⑤ 学びタイムの内容【佐田・弘田・吉本】 ⑥ 基礎計算【佐田・弘田・吉本】 ⑦ 児童の学習アンケート【竹又・中川】 ⑧ 家庭学習アンケート【竹又・中川】 ⑨ 家庭学習のあり方、具体的内容【竹又・中川】
国語部会 「確かな学力」の向上 ・主体的に学び合う児童の育成	国語 ・自分の考えを言葉で伝える力が弱い。 ・話し合う力、書く力も弱い。 ・発表や本読みの声が小さい。	「課題を解決できる力」の育成 ・聞く力の育成 ・書く力の育成	① 問題解決型の授業実践の推進【山下・深瀬】 ② 児童の実態把握【永野・岡崎】 ③ 児童の学習アンケート【林】 ④ 学びタイムの内容【宮崎】 ⑤ 漢字到達度テスト【山口】 ⑥ 各学年の指導のポイント作成【池田・永野】
心の部会 「豊かな心」の育成 ・自らを律しつつ、仲間とともに協調し、友だちを思いやる心を育てる。 ・自分や友達を大切に、人間性豊かな子どもを育てる。 ・支援が必要な児童に対して適切な支援をする。 ・きまりを守り、安心して楽しく学校生活を送れる集団を育てる。（5あ）	・明るく元気がある。 ・友だちのいいところを見つける児童が増えた。 ・下級生を思いやる気持ちや温かみが育ちつつある。 ・自尊心の低い児童がいる。 ・自己中心的で周りの人への関心が弱い児童もいる。 ・きまりが守れない児童がいる。	「やさしい心」の育成 ・自分を大切にする心（自尊感情） ・明るい心 ・思いやりの心 ・支え合う心	① ありがとう見つけ【谷中・増田】 ② Q-U検査の分析・児童理解【嵐・松本宏・押川】 ③ 道徳授業・人権学習の充実【村上・乾】 ④ 「5あ」の取り組み・生活指導【乾・嵐】 ⑤ 学校生活アンケート【乾・松本宏】
体の部会 「健康でたくましい体」の育成 ・健康の保持増進と体力の向上を図る。 ・望ましい生活習慣の定着を図る。	・元気に外で遊べる児童が多い。 ・休み時間の過ごし方に課題がある。 ・自分で考え行動しようとする意識が弱い。 ・望ましい生活習慣の定着が弱い児童がいる。 ・昨年度の体力テストの結果が、全国よりやや下回っている。	「共に生きる力」の育成 ・健康安全に対する意識と態度 ・望ましい生活習慣の定着 ・バランスのとれた体力・運動能力 ・友だちを大切に、なかよく助け合える集団としての力	① いきいき生活カード【島田・松本】 ② 保健指導、保健朝会【島田・松本】 ③ 体育アンケートの実施【秋田・渡辺】 ④ 体育授業の改善【秋田・渡辺】 ⑤ 青空朝会【秋田・渡辺】 ⑥ 仲間づくり【秋田・松本】 ⑦ 朝マラソン、朝なわとび【秋田・渡辺】

(3) 市立中村西中学校の取組

ア 自己実現を目指した教育活動の展開（マズローの応用）

(7) 授業場面や生活面等における日常的な声掛けについて生徒指導の3つの機能を生かした内容を意識して行っている。



- (イ) 子ども理解の一助となる教育相談については、各学期に1回生徒全員を対象に行っている。
- (ロ) 意識調査については、時期を変えながら人権意識調査・道徳教育意識調査・QU学級集団調査・いじめ防止チェックシート・学校生活アンケート・学校評価アンケート調査を定期的に行っている。

イ 授業改善を骨格にした校内研修の充実

- (7) 小中連携に視点を当てた授業改善と校内研修に努めている。
- (イ) 中村西中学校のスタンダードを提示し、公開授業の観点並びに授業設計のポイントを明確にしている。
- (ロ) 事後研の中で参加者から授業の反省を観点ごとに具体的に聞き取った評価シートと、生徒の授業評価と合わせて分析している。

ウ 生徒指導の三機能を活用した授業評価

- (7) 「授業に生徒指導の機能を生かすためのチェックリスト」に基づいて生徒は、自己決定の場・自己存在感・共感的な人間関係の育成の観点から授業を評価する。

エ 授業評価の点数化と全教員による共有化

- (7) 「授業研究会参加者シート」に基づき、学習過程ごとに設定した評価の観点を点数化し、客観的なデータを全教員で共有化している。

年 組 科 授業研参観者シート

日 時：平成 年 月 日 () 第 校時

授業者： _____ 記載者： _____

項目	内容	評価	
導入	①めあて提示	<ul style="list-style-type: none"> 「授業のめあて」が黒板に書かれていた 「授業のめあて」は具体的でわかりやすい言葉であった 「授業のめあて」の提示は工夫されていた めあての達成につながるように、発問の仕方が工夫されていた 	
	②課題の追求 (共感的人間関係 自己決定の場)	<ul style="list-style-type: none"> 生徒どうしの学びあいなど学習形態の工夫があった 思考力・判断力・表現力の育成の時間があった 授業内容の質や量は妥当であった 	
展開	③めあての達成状況の把握	<ul style="list-style-type: none"> チェックで不十分と判断した場合の補充・補説があった 達成したと判断した場合には発展内容に取り組ませていた 	
	④まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 「まとめ」は板書に整理し残っていた 「まとめ」と「授業のめあて」を結びつける授業であった 生徒自身が自分の学習を振り返る時間があった 	
結末	⑤次時の学習内容の予告	<ul style="list-style-type: none"> 夜時の「授業のめあて」につながるようになっていた 主体的活動(予習)につながる予告の仕方がされていた 	
	⑥自己存在感	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に対する名前呼びや言葉遣いが適切であった 生徒一人一人の様子を見て、声をかけていた 生徒の発言に対して常に肯定的評価がされていた 	

各小項目を《○・△・×・—》で評価し、総合的に判断して①～⑥の内容を《4…できている、3…だいたいできている、2…あまりできていない、1…できていない》で評価してください。

個人の振り返り

研究授業・協議・講評等を通して学んだこと、今後の授業実践に生かしたいことなどを記入してください。

4 成果と課題

(1) 成果

- ア 四万十市では「知」「徳」「体」の視点で、児童生徒の現状を分析し、各学校、教員が同じ問題意識を持ち、課題を把握し、日々の教育活動に取り組んでいる。「ALL しまん」とを合い言葉に「一校一役指定研究」を行うなど、各学校が研究を推進できるよう教育委員会がサポートしている。
- イ 市立具同小学校長から色々と説明していただいたが、指導主事を務めていた経緯もあり、大変綿密な学校経営計画を学ぶことができた。学力調査の分析も細かく、設定目標（点数）も明確にして日々の研修を行っていた。
- ウ 市中村西中学校は具同小学校の児童が進学してくる。しかし、県立の中学校へ優秀な生徒が流れていくため、学力や生徒指導上の問題も抱えている現状にあるが、授業改善を骨格にし、教育相談や研修体制を確立して日々の実践に取り組んでいる。特に、生徒指導の機能を活かした授業改善は注目に値する。

(2) 課題

- ア 別海町の教職員の課題意識の共有化については、本町は距離が遠く横の繋がりが希薄であることを改めて課題として受け止めたい。例えば隣の学校の研修課題を知っているだろうか？各学校で研究会等を行っても時期が重なり、なかなか参加できないのが現状である。そこで活用すべきは別教研ではないかと考える。生き抜く力を向上するためには、別海町の子どもたちには何が必要かを明確にし、それを基に別教研で別海町共通の研修課題・仮説を立て、それに沿った形で各学校が研修を進めていき、年3回の研修日は、当番制にして各学校へ別海町の教員が全員参加する研修にしていけば、最近では見られない大変充実した活気ある研究会になる。「研究授業参観の視点（シート）」も別海町共通の様式があれば更に効果的である。
- イ 生徒指導の3機能を活かした授業改善（自己決定・自己存在感・共感的な人間関係）については、別海町の中学校では一教科一人の学校が多く、同じ教科の先生から教材研究の方法を学びたいという声があるが、この生徒指導の3機能を授業の視点として重点を置くなら、教科の垣根なく研修を進めていけるのではないかと考える。どんな教材を使うかではなく、その教材をどう生かして生徒を育てていくかという生徒指導の3機能を意識していけば、どの教科でも同じ視点に立って生徒を指導していける。小学校教員もこの視点であれば、中学校の授業研修にも積極的に参加できる。
- ウ 授業評価の見直しについては、研究授業において最近では、付箋紙に意見などを書いて交流するワークショップ形式等で事後研修を行っているが、具同小・中村西中では「研究授業参観の視点（シート）」があり、授業者が予め意識していた視点が「できたか、できなかったか」を点数化し評価している。大変シビアだが、授業力（教師力）を向上するためには取り組んでいく価値がある。もちろん、他者に評価してもらうだけでなく、自己評価の指標があれば授業改善に繋がっていく。

第3章 各ブロックでの「別海町型教育」の推進案について

視察研修終了後、中央地区・東地区・西地区の各々が担当している課題に対してブロックごとに協議をし、視察地の取組を参考に、「別海町型教育」の確立に向けた推進案を考察した。各ブロックでの「別海町型教育」の推進案は次のとおりである。

1 学力の向上（中央地区担当）

「生き抜く力を身に付けた子とは、学び続ける子どもである」

<案①> 学びの自覚（学ぶ意識の自覚化「自律的学習者」の育成）

9年間を見通した学びの自覚化計画を実施。

<案②> 授業改善（意図的な交流を生み出す表現の場の工夫）

自分の考えを表現する場面、意図的な話し合い活動の導入。⇒言語活動の充実

<案③> 家庭学習（やらされている意識の回避）

「みんなでやろうぜ！家庭学習」WEEK

町内全児童生徒の家庭学習合計時間を可視化。⇒数値が児童生徒の励みに

※詳細は以下の【イメージ図】のとおり

【イメージ図】



2 生活力・体力の向上（東地区担当）

「生き抜く力を身に付けた子とは、ボディ（食・運動）と メディア（生活）をコントロールできる子どもである」

<案①>生活の点検（学校・家庭・地域で取り組む）

学校：生活実態調査⇒メディアコントロールシート等の活用。

家庭：親子の会話で生活ルールを意識づけ、子どもたちに自覚させる。

地域：町民の合い言葉で情報モラルの意識向上を図る。

例) スイッチOFF22（22時にテレビやSNSの電源を切る）

<案②>食育の推進（栄養教諭の専門性を生かした給食指導の工夫）

1校1品 給食メニューコンテストの開催。

学校給食センターからの贈り物。（星型ニンジンのカレーライスに混入など）

<案③>運動の充実（体を動かす楽しさを実感できる場所と時間の創出）

町内全校で縄跳びの実施。

中学校教諭による積極的な出前授業の実施。

校舎内外の空間を利用した遊び場の仕掛けづくり。

※詳細は以下の【イメージ図】のとおり

【イメージ図】

別海型の教育の推進

平成26年12月11日
別海町教育委員会
指導室作成


食育の推進

偏食 少食 孤食

栄養教諭の専門性を
生かした給食指導の工夫

【1校1品コンテストの開催】
地域の食材や苦手の食材など、子どもの発想を生かした料理コンテストを行い、各学校で選ばれた優秀レシピを給食メニューにする。

【学校給食センターからの贈り物】
献立表に「luckyday」を設けて、星型の人参や色違いの団子などをメニューに入れて食に関する意欲を喚起する。



生活の点検

学校・家庭・地域の
役割の再確認と
具体的な取組

学校：生活実態調査の効果的な活用(PDCAサイクル)

健康観察やメディアコントロールシート等を活用して、子どもの生活に関する調査を行い、よりよい生活習慣が確立できるよう働き掛ける。

家庭：親子の会話で意識づくり(アサーティブで良好なコミュニケーション)

SNSの約束や睡眠時間の確保等の話題を積極的に親子のアサーティブな会話に取り入れ、改善意識の自覚を図る。

地域：町民の合い言葉(スイッチOFF22)で情報モラルの意識向上

「早寝・早起き・朝ごはん、テレビを止めて外遊び」に加えて、情報モラルの意識向上を図る「スイッチOFF22」(22時にテレビやSNSの電源を切る)運動に取り組む。

ストレスだけでなく、肥満もメンタル不全の原因となります。

運動の充実

体を動かす楽しさを
味わう場所と時間の工夫

全校縄跳び

- 「どさんこ元気アップチャレンジ」の活用(道教委)
- 始業前の時間の利用や検定カードによる取組
- 跳んだ回数の可視化

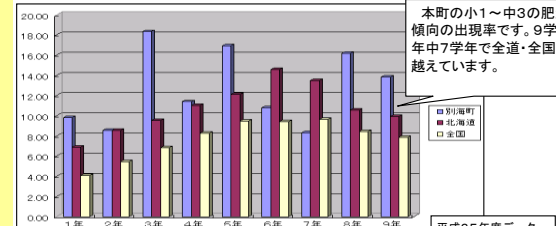
中学校教員による出前授業

- 指導内容や評価方法に関する実践研修の場
- 器械体操など専門性を活かした小中連携
- 運動の楽しさを知るきっかけ作り

校舎内外の空間を利用した遊び作り

- ◇ 校舎内のデットスペースを利用した遊び場づくり
- ・ 立ち幅跳び ・ バランスボード
- ・ ジャンプタッチ ・ トネルロード など

子どもの生活力・体力向上



本町の小1～中3の肥満傾向の出現率です。9学年中7学年で全道・全国を越えています。

「コントロールしよう!ボディとメディア」

BMC

3 教師力の向上（西地区担当）

「生き抜く力を身に付けた子どもは、私たち教師が育てる」

<案①>授業改善

小中一貫で子どもの育ちを！

⇒中学校区で教育活動のつながりを見直し、教育課程の改善を図る。

<案②>共通した授業視点

「良い授業」の Check Ten！

⇒公開授業で町内教職員の共通視点の項目を作成。

<案③>授業技術の向上を図る校内・外研修内容の見直し

校内：①隙間の時間を利用したミニ研修の実施。

②模擬授業や場面指導など授業技術向上研修の実施。

校外：①主要な研修会及び研究会の内容を共有化するために「指導室だより」を発行。

②本町の教育課題の解決に向けた独自の地域別研修会の開催。

※詳細は以下の【イメージ図】のとおり

【イメージ図】

平成26年12月4日
別海町教育委員会
指導室作成

別海型の教育の推進

校内研修

○授業技術の向上を図る研修内容の見直し

- ・仮説検証型研究に特化せず、模擬授業や場面指導など授業技術向上研修を取り入れる。
- ・授業場面における教師の動きやかかわりを検証できるチェックシートを開発する。
- ・授業中の発言を記録したり、子どもの様子を撮影したりするなど自己点検を行う。
- ・隙間の時間を利用したミニ研修を実施する。

小中一貫で
子どもの育ちを
促せる研修の推進

子どもの育ちを意識した交流研修会の充実

□中学校区での取組
*教育活動のつながりを見直し、教育課程の改善を図る。
*15歳の育ちを共有し、学習規律や生活規律を検討する。
*地域で育てる意識をもって、効果的な研修会を開催する。

子どもと教師の信頼関係を構築する授業の工夫

□生徒指導の3つの機能を活かした授業
*自己決定の場があるか？
*自己存在感を与えているか？
*共感的理解を図っているか？

教師力の向上

別海の子は私たちが育てる

教師一人一人が教師力を高めると・・・
学級が変わります！職員室が変わります！学校が変わります！そして、子どもたちが学校生活を楽しむようになります。

「よい授業」のCheckTen！

【私は公開授業で次のような視点で授業を観て学びます。】

<子どもの様子>

- 1子どもの目線はどこにあるか？
- 2子どもの声の大きさが場に合っているか？
- 3子どもが夢中になる場面はあるか？
- 4子どもの反応を見逃していないか？
- 5教師の指示に子どもは反応しているか？

<教師の様子>

- 6教師の立ち位置に意図はあるか？
- 7明確な課題(問題)提示ができていないか？
- 8授業に参加できない子どもを支援しているか？
- 9子どものつまずきの予測と手立ては適切か？
- 10子どもへの指示は具体的で分かりやすいか？

校外研修

本町の教育課題を解決する
別海町教育研究会の充実

- 町内の公開研究会を参観する際の授業改善の視点を設ける。
- 同一の規模や研究テーマの学校間で情報交流を積極的に行う。
- 主要な研修会及び研究会の内容を共有化するために「指導室だより」を発行する。
- 本町の教育課題の解決に向けた独自の講座を設け、中央集中型ではなく、地域別研修会を開催する。

- ◎次代の本町を担う人材育成
- ◎生きる力をはくむ
- ◎信頼される学校づくり
- ◎特色ある教育活動の展開
- ・日常の授業改善のきっかけ
- ・個に応じた指導の充実
- ・校種の一貫性による研究

おわりに

本報告書では、「生き抜く力（質の高い学力・豊かな心・逞しい生活力）アッププロジェクト事業」により設置した「別海町生き抜く力向上策定プロジェクト会議」での今年度の取組内容を取りまとめた。

第1章では、本事業の主旨や内容、会議等の実施状況について記述し、第2章では、教育に関して先進地域である秋田県横手市、大分県豊後高田市、高知県四万十市での視察研修の内容を視察地ごとに報告書としてまとめた。

第3章では、視察研修等を踏まえ、本プロジェクト構成員でブロックごとに協議した内容を「別海町型教育」の推進案として提案した。

別海町型教育を構築するためには、今後も一人一人の子どもたちのために教壇に立っている町内の教職員が、本町にあった取組を検討し続ける必要がある。

そのため、次年度も町内の教職員が教育に関する先進地を視察し、本町と先進地の取組を比較分析し、本町の将来を担うであろう子どもたちのために別海町型の教育を確立できるよう、本事業に力を入れていきたい。

最後に、本事業を進めるにあたり、視察を受け入れていただいた秋田県横手市、大分県豊後高田市、高知県四万十市の教育委員会や学校の方々、別海町型の教育構築のために、本プロジェクトに携わり、多くの提案をしていただいたプロジェクト構成員の方々に深く感謝申し上げたい。

編集・発行

別海町教育委員会指導室、学務課（学校教育担当）

平成26年度
別海町生き抜く力向上策定プロジェクト報告書
平成27年3月発行
編集・発行
別海町教育委員会指導室、学務課（学校教育担当）